

## 援助における「文化」

### - フィリピン人DV被害者女性の語りを通しての考察 -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
吉嶋 かおり

本論は、ドメスティック・バイオレンス(以下「DV」)の被害を受けたフィリピン人女性の語りを読みとることを通して、「文化」に敏感な(culturally sensitive)援助について考察するものである。

DV被害者は「苦」を経験する。援助は、被害者の「苦」の生成と構成のプロセスとコンテキストのなかで行われるが、在住外国人に対しては、その中で「文化」にからむ領域が現れる。援助者はもはやそれを無視することはできない。援助者が自分の思い込みに気づかなければ、援助は行き詰まり、対象者に対して有害とさえなる。本論では、援助者に求められる「文化的能力(cultural competence)」が、援助場面でどのように用いられるのかについて考察した。

事例として、第2章で、DV被害を受けたフィリピン人女性の語りを記述した。そこでは、様々な「苦」が生起し、彼女がそれをどのように考えたり、行動したりしたかということが表れた。続いて第3章では、彼女の行動や認識などに現れる意味を、様々な資料を用いて解釈した。取り上げた項目は、筆者が「文化」と受け止めたもの 差異を感じたものである。最後に第4章では、その解釈という行為が、援助においてどのような意味があるか、また、「文化」を援助場面でどのように扱うかについて考察した。行動や認識に象徴される意味を解釈することを通して、援助者の様々な概念や価値観は相対化され、ずらされていく。すると、援助者と対象者の間には、ズレあるいは間が生じる。そのズレや間を見据え、それに向き合う援助者は、さらに概念や価値観が相対化されるという循環が生じる。相対化される援助者の概念や価値観はあらゆるものに及び、それには、DVの認識や、臨床的理論、知識、技術も含まれる。そのような場において、対象者は自分自身の概念を相対化していくことができる。援助者の概念を用いて自分自身の概念を照らし、相対化し、自分の問題について最も妥当で納得のいく解釈を選ぶことができる。援助者と対象者の両者の差異は交渉するものであり、そこから、両者の合意が生まれる。

援助者に課せられる責任は、そのような交渉の場をつくることである。そのために必要な対象者の「文化」に関する知識を得る必要がある。また援助者は、自分の概念や価値観の相対化を繰り返し、対象者との交渉の場を保たねばならない。援助者に課せられているのはその作業であり、その作業をすることへの自覚と責任である。

これは、異なる「文化」をもつ人々との間だけでなく、すべての人々との間に起こっている。なぜなら、すべての人々の「文化」は異なっているからである。「文化」を扱い、「文化」について考えること。援助を職とする者は、臨床現場においても、臨床教育においても、それが必要であることは避けられない。